



ブランドの味力

2023 県農林水産祭

◆ 上 ◆

質、量共に日本一。大分県は乾シイタケの「王国」として名をはせる。分県は乾シイタケの「王国」として名をはせる。分県は乾シイタケの「王国」として名をはせる。

6月の第70回全国品質評会で、算56回目の団体優勝を果たした。昨年生産量は768・8トで国内シェアは4

林業 乾シイタケ



県産乾シイタケをPRする県椎茸農協の難波博樹さん(右)ら。大分市の同農協直売所、撮影・山戸孝哉

「うまみだけ」味わって

割近くを占める。

県内は明治時代、生育に適したクヌギの植林が進むと、原木栽培が盛んになった。生産者は互いに切磋琢磨し、産地の技術力を底上げしてきた。

豊後大野市三重町中津留の三浦千秋さん(71)は栽培歴が50年を超える達人として知られる。「肉厚なシイタケを多く取るには、ほた場の温度と湿度を適度に保つ必要がある。天候や原木を日々確認している」と今も手入れを欠かさない。

ただ、歴史ある特産品も近年は食生活の多様化などで消費が落ち込んでいる。総務省の家計調査によると、全国1世帯当たりの昨年の年間購入量は40%で、10年前から45%減少した。需要低迷は県内の担い手不足にも拍車をかけている。昨年の生産者数は3158戸で、5年前から806戸(20・3%)減った。高齢でやめる人たちの後継者をつくるには、消費を喚起して安定した収入を確保することが求められる。

新ブランドで消費喚起

県は対策として、2020年に新ブランド「うまみだけ」を打ち出した。

ステーキで食べるのにもつてこいの肉厚な品種「115(いちいちご)」、唐揚げやミンチ料理に適した歯応えのある「にく丸」、ギョーザやだしに合う香り豊かな「ゆう次郎」…。味わいなどの特徴ごとに品種を八つに分けてPRする。これまででは「どんこ」「こうご」といった主に形状別に販売してきたものを、食べ方に応じて提案すること

で支持の拡大を目指す。県農林水産祭では、県椎茸農協がうまみだけの詰め合わせを販売するほか、シイタケを使ったカレーやしようゆといった加工品もアピールする。難波博樹直販営業部長(51)は「たくさんの人に味わってほしい」と呼びかける。

(佐藤章史)

秋の恵みが並ぶ恒例の県農林水産祭「おおいたみのりフェスタ」が21、22の両日、別府市野口原の別府公園で開かれる。県内の農・林・水各部門の代表的な産品の魅力や、産地の現状、課題を伝える。

シイタケ生産を含む林業部門は計34団体が出展する。県木材協同組合連合会は、親子連れらが2万枚の積み木で遊べるコーナーを設ける。大分日田げた組合の実演販売もあるほか、大分森林管理署などは丸太切り体験会を企画している。

農作物被害の対策などに取り組む団体や企業が、野生鳥獣肉(ジビエ)の料理を提供する「森のレストラン」を開く。別府溝部学園高はイノシシ肉のハヤシライス売り出す。林業者を育成する「おおいた林業アカデミー」(由布市湯布院町)の紹介もある。

丸太切り体験、ジビエ料理提供



記事をよく読んで、問①～⑤に答えましょう。問⑤は自分で考えてみましょう。

〔問①〕 次の文の（ ）に数字を入れて文章を完成させましょう。

「乾シイタケの第70回全国品評会で、県勢は（ ）大会連続で通算（ ）回目の団体優勝を果たした。昨年の生産量は（ ）トンで国内シェアは（ ）割近くを占める」

〔問②〕 肉厚なシイタケを多くとるには、ほだ場の何を適度に保つ必要がありますか。

答え 【 _____ 】

〔問③〕 県が消費を喚起（かんき）するための対策として、2020年に打ち出した新ブランドの名前は何ですか。

答え 【 _____ 】

〔問④〕 県はどういった提案をすることで支持の拡大を目指していますか。

答え 【 _____ 】

〔問⑤〕 乾シイタケの他に、あなたが全国に人にもっと広めたい大分の食材は何ですか。その理由も考えて書きましょう。

.....

.....

.....

.....

.....